

こころ

県P連だより

編集 徳島市北田宮1丁目8-68
発行 〒770-0003 ☎088-633-1105
徳島県PTA連合会

ホームページ
<http://www.tokukenpta.com/>

あいさつ



会長 先田 仁美

日頃より、徳島県PTA連合会の活動に際し、ご理解・ご協力をいただき、感謝申し上げます。猛威をふるっていた新型コロナウイルス感染症は、令和五年五月八日より季節性インフルエンザと同じ五類感染症に位置づけられ、これまでと対策などが大きく変わっていく中、以前の日常を少しずつ取り戻しつつあり、子どもたちの活気や笑顔も戻ってきたように思い大変嬉しく思います。PTA活動は、もちろん子どもたちの健やかな育成のため、そして安心して安全な学校生活を送れるための活動であります。保護者や先生方、そして地域の方々など大人にとりましても有意義で楽しく、研修会なども開催され多くの「学び」や「気づき」を知

ることができる活動でもあります。しかし、共働き家庭やひとり親家庭の人たちなどにとっては、PTA活動が煩わしいだけのものになり、なかなか参加していただくのが難しい場合もあります。最近のPTA活動は、負担軽減を重視した取組をされている学校も多くあり、我が県P連でもそのような取組を行っております。まだまだ見直し段階であるところもありますが、多くの方に「PTAって楽しくて勉強にもなるね、活動して良かった！」と言ってもらえるような組織作りのお手伝いができればと考えております。会員の皆さまと共に、子どもたちの健やかな成長を応援し、笑顔を守っていけるような活動ができたらと思います。今後ともより一層のご理解・ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

県P連総会

本年度の定期総会は六月四日(日) 県教育会館において、新型コロナウイルス感染症が五類に引き下げられたので三年ぶり

に来賓の皆様を招待して対面で開催しました。

県P連役員・郡市代議員・受賞者の方々の出席のもと、令和五年度定期総会が開催されました。先田仁美会長のあいさつに続

き、熱心な活動をされた四団体と三十四名の方に表彰状と十二名の方に感謝状が、そしてPTA広報紙コンクールに入賞された三校に表彰状が贈られました。その後、樺山賢太郎氏の受賞者代表謝辞へと進みました。議事に入り、令和四年度の事業報告・決算報告・監査報告・業報告を承認の後、令和五年度新役員が選出され、次に令和五年度努力目標、事業計画・予算案等についての協議が行われ、原案どおり承認の運びとなり、総会を終了しました。



令和五年度 役員

会長 先田 仁美

副会長 蟹江 美子

平岡 春香

木村 公明

佐藤 央一

(役員会推薦)

副会長 阿部 美紀

佐藤 信之

高橋 明

(県中学校長会副会長)

理事 納田 明豊

殿川 孝昭

岡部 勇輝

井上 拓郎

遊塚 将也

辻 孝

山下 昌志

若竹 雄太

佐藤 文幸

西岡 孝晃

泉 富士夫

井本 友子

広報委員長 濱田 恵

研修委員長 田淵 郁康

総務委員長 先田 仁美

(役員会推薦)



ブロック別PTA活動紹介

～地域の伝統を守り 未来へつなげよう～

家庭・学校・地域の連携

★次号のブロック別PTA紹介は、阿南市P連、美馬市P連、板野郡P連です。

中部ブロック 鳴門市幼小中PTA連合会

会長 蟹江 美子

鳴門市幼小中PTA連合会は、2022年の公立幼稚園の再編に伴い、現在は幼稚園7園、小学校13校、中学校5校で構成されており、園児・児童・生徒数は3,886人です。5年前のブロック別紹介の時と比べると約1,000人減少しており、少子化の波を感じざるを得ません。

鳴門市P連では、各単位PTAで事務局と常置委員会の役割を分担して活動をしています。事務局校・園は各単Pや県P連・県幼P連との連絡や取りまとめを行い、その他すべての単Pが常置委員会の「研修委員会」と「体育委員会」のどちらかに所属し、家庭教育研修会やバレーボール大会、綱引き大会を企画・運営しておりましたが、コロナ禍の3年間はいずれも中止を余儀なくされました。

今年の5月に新型コロナの感染症法上の位置付けが5類に移行されたことを受け、各単PでのPTA活動は少しずつ再開されています。鳴門市P連としましても「研修委員会」では、11月2日に4年ぶりの家庭教育研修会を開催することができました。今回は、一般社団法人ソーシャルメディア研究会チーフ技術指導員の竹内義博氏を講師にお招きして、「スマホ時代の子どもたちのために～被害者にも加害者にもならない～」と題して講演をしていただきました。携帯電話やスマホを持つ年齢はどんどん低年齢化しています。私たち保護者が子どもの頃とは異なり、インターネットが当たり前身近にある時代です。自分では気が付かないうちに個人情報を出してしまったり、SNSを通じていじめの加害者になってしまったり、スマホをめぐるトラブルは誰にでも起こりうる問題です。保護者として、どのようなことに気をつけて子どもたちと向き合っていけば良いのかを学ぶことができました。

「体育委員会」が担当するバレーボール大会はこれまでに50回以上、綱引き大会は30回以上続けられてきた鳴門市P連の伝統的な体育大会であり、今年度はどちらの大会も4年ぶりに開催されるのではないかと期待されておりました。しかし近年、少子化によるPTA数の減少、



核家族世帯や共働き世帯の増加などの様々な理由により、選手やサポートスタッフとして参加できる保護者や先生方の確保が難しくなってきました。そこにコロナ禍の大会中止期間が重なり、これらの体育大会の在り方そのものを見直してはどうかという意見が聞かれるようになりました。そのため、6月に開かれた会長会で今年度のバレーボール大会は中止とし、2月の綱引き大会についても開催を望む声、望まない声があるため、来年度以降の体育大会の回数や種目について見直すことも踏まえて、慎重に検討をすることになりました。

このように鳴門市P連は活動の転換期を迎えています。活動をやめてしまうことは簡単ですが、それは活動を通じて「会員同士が交流できる場」が失われることとなります。単Pの枠を超えたつながりは、子どもたちの健全育成や災害時の地域連携などに欠かせないと考えます。これまで培ってきた良き伝統を大切にしつつ、時代の変化に伴う新しい意見に耳を傾け、会員の皆さんが参加しやすく、子どもたちのためになるPTA活動を模索していきたいと思えます。



南部ブロック 小松島市PTA連合会

会長 佐藤 文幸

小松島市には、2中学校(小松島、小松島南)と11小学校(小松島、南小松島、北小松島、千代、芝田、立江、櫛淵、坂野、和田島、新開)があり、内12の小中学校で小松島市PTA連合会(以下、市P連)を構成しています。

市P連の活動については新型コロナウイルス感染症拡大以降、様々な事業については自粛、もしくは中止となり、感染症の位置付けが5類となって以降も、市内PTA会員の交流の場である今年度の球技大会(ミックスバレーボール)も、中止、今後の開催のあり方を再検討している状況です。しかしながら、恒例となっている市P連振興大会(例年2月頃)については開催に向けて準備を進めているところです。各学校の運営が、また、各PTA活動の通常通りの実施が、速やかに、かつ穏やかにソフトランディングできることを願ってやみません。

以降は2つの流れや取組について紹介します。

本市においても想定を超える児童数の減少が進んでおり、大半の小学校でクラス替えができない状況となってきました。また、学校施設の老朽化も相まって、教育条件や環境、学校運営などにも様々な影響が懸念されることから、小学校の再編方針の流れが現実にあります。

中学校については、すでに2016年4月に3校(小松島、立江、坂野)から、2校(小松島、小松島南:新設)体制となっていますが、小学校については2018年度に小松島市立学校再編基本計画が、また、2022年2月にはその実施計画がとりまとめられました。

現在、これまでの議論や検討、PTAを含む多くの人々のご意見をもとに、小松島中学校区のうちの4校(小松島、南小松島、千代、芝田)を再編する新小学校と、小松島南中学校区のうちの4校(立江、櫛淵、坂野、新開)を再編する新小学校の施設整備について、市の実情に応じた教育の推進や未来へつながる学びや人材育成、未来創造力を培う事などを趣とする新しい新小学校施設整備計画を策定しているとのことです。

市では、PTAや就学前教育保育関係者、学童保育クラブ、福祉関係、県内大学からの有識者や地域の方々などで構成する学校再編準備会議や専門部会を開催し、準備会議においては、『つながり』により子どもたちが育つ学校』を基本コンセプトとして協議し、開校に至るまでの再編の課題などについてやり取りが行われています。

その準備会議や専門部会(総務部会、通学部会)に、市P連本部役員(副会長2名)や教職員も参画し、保護者として、また地域の一人として活発な意見や想いを、市



や教育委員会、参加されている委員の皆さんにもご理解いただけるようお伝えしているところです。
学校再編に対して

の賛否は、当然あると思われませんが、真にこれからの未来をつくり、そして生きていく子どもたちの目線に立った再編やその施設整備、また、地域づくりに良質につながっていくことを願うものです。

私たちPTAは時代や環境の変化に即応した、教育現場での指導や家庭内外でのあたたかい見守りを引き続き行うことが何より重要ではないかと考えています。

2022年の「自転車の安全利用促進委員会」のまとめによると、徳島県内の中学生が通学中に交通事故に遭った件数は、1万人あたりで11.8件(全国平均4.9件)と都道府県別で4番目に多かったとの報道がありました。中学生には再度通学時の交通ルールの順守を徹底させていただくことを、また、徳島県は全国有数のドライバーマナーの悪さが指摘されていることから、我々PTAを含め、ドライバーの交通マナーの向上と、人や自転車に十分注意を払っての運転を心がけていただくことを願うものです。

2021年12月本市において登校中の小学校4年生が、県道交差点においてトレーラーにはねられ死亡するという本当に痛ましく悲しい事故がおこりました。

私は集団登校を採用する小学校に子どもを通わせていたことから、6年間あまり学期中は毎日のように、子どもたちの登校に先導や見守りをかねて同行しておりました。その間、度々報道にある登校の列に車が突っ込んで来るようなことがないかなどを心配しながら、なんとか無事小学校の保護者活動をもうすぐ終えさせていただけると思っていた矢先の事故で、それは他の小学校の子どもとは到底思えない深い悲しみを覚えました。市P連役員会の会場においても全員で黙祷、哀悼の意を捧げました。ご家族や学校のお友達、先生方の心痛な日々は一言ではとても言い表せるものではなかったと思います。



本市でも通学路の安全確保に向け、学校関係者(小中学校長会、教育委員会、市P連他)、警察、国・県・市道路管理者等、市交通安全普及担当課が連携を行う「小松島市通学路安全推進協議会」(市学校課事務局)を2015年度より設置し、「小松島市通学路安全プログラム」を策定、本プログラムに基づき関係機関の強い連携とご協力の下、危険箇所の抽出、合同点検の実施(市内を3グループに分け3年に1度重点的精査)、対策の検討(ソフト・ハード両面)、対策の実施を行うとともに、その合同点検結果、対策実施箇所と対策内容を公表するなど、児童等が安全・安心して通学できるよう計画的かつ継続的な取組に尽力されております。引き続き、ひとたび事故がおこらないと対応が取られないような事がなく、なんとか未然に防止できるような対策がなされ、ふたたび悲しい出来事がおこらないよう心から望むものです。

結びに、子どもの教育環境の改善や通学時等の安全・安心は、子を通わせていただいている保護者にとって永遠の願いであることはきっと変わらないと思うのです。

西部ブロック 阿波市PTA連合会

会長 遊塚 将也

阿波市PTA連合会は14校(小学校10校、中学校4校)で構成されています。ここ数年はコロナウイルス感染症拡大予防のため、ほとんど活動できていませんでした。今年も5月に感染症法上の分類が5類に移行したものの、阿波市では感染の状況が落ち着かなかつたこともあり、これまで行っていた交流や行事は、今年度も未だままならない状況が続いています。一方で登下校時の見守り活動や、例年PTAも参加している阿波市教育講演会・人権講演会などは、人数制限やオンラインでの参加など、感染拡大に注意しながら、できる範囲での活動を行っており、今後も引き続き実施していく方向です。

ただ、そのような中でも各单位PTAの行事は、5類移行を踏まえ、感染拡大防止に工夫を凝らしながら実施されるようになってきました。授業参観やPTA総会、運動会や体育祭・文化祭、愛校作業などの学校行事も、徐々にではありますが会員の皆様のご協力を得ながら再開しつつあります。

これまで阿波市PTA連合会では、5月の総会をはじめ、8月には阿波市や阿波吉野川警察署、阿波市青少年育成センターなど関係機関と連携した通学路の安全状況調査、阿波市教育会主催の教育講演会への参加や阿波市人権教育講演会への会員の参加、県P連主催の各種行事への参加等を中心に活動してきました。以下、今年度の主な活動について紹介したいと思います。

まず毎年5月に開かれる阿波市PTA連合会総会ですが、コロナ禍のためここ数年書面開催となっておりましたが、今年はコロナの5類移行を受け、3年ぶりに対面形式で開催されました。感染拡大防止のため、人数を限定した縮小開催となりましたが、久しぶりに顔を合わせて開催されたこともあり、旧知の方との再会を懐かしむ様子も見受けられました。

また8月の通学路の安全状況調査は、各学校単位で行われており、児童生徒の通学路の状況を実際に現場に赴いて確認し、改善すべき点がないか、関係機関の意見も参考に毎年行われています。実際の手順としては、各校で事前に保護者や地域、学校からあがった通学路の危険箇所を各校で3～4カ所ほどピックアップし、実際に関係機関と現場に赴いて確認します。特に危険な場所についてはこれまでも横断歩道の設置や標識・のぼりがつけられるなどドライバーや歩行者、自転車に



も注意を促すよう改善がなされた箇所も多くあります。

続いて8月の教育会教育講演会ですが、毎年様々な分野の講師を招いて、阿波市PTA連合会も後援する形で開催されています。また各校より保護者にも周知し、参加を呼びかけています。今年度は一般社団法人メディア教育研究室代表理事の今度珠美さんより「デジタル・シティズンシップ 善き使い手になるための学び」と題してオンラインでご講演をいただきました。GIGAスクール構想に代表される学校教育の大きな変革や携帯電話の普及など、子どもたちだけでなく私たち大人を取り巻く環境も大きく変化している現在、LINEやSNS等を巡るトラブルは喫緊の課題であり、同時にメディアとどうつき合い、どう使いこなしていくかなど、課題は絶えません。今回の講演は、デジタル時代のメディアの特性を改めて知るとともに、よりよい社会を築くためにデジタル市民として様々なテクノロジーを責任を持って使いこなすためにはどのような資質が必要であるかなど、示唆に富んだお話をいただきました。

さて、新型コロナウイルスによって生活様式が大きく変化したこの3年間を振り返ると、これまであたりまえだった色々な活動がどれだけ貴重なものだったか、と考えさせられることも多くありました。特に人が集まる機会が少なくなったことでPTA活動も制限され、学校と保護者、また保護者同士が顔を合わせる機会が減ったのは大きかったと思います。誰が先生で誰が保護者なのか、よくわからない、という声を聞いたこともあります。PTA活動に限らず、お互いが顔を合わせ、会話をすることこそ生まれるつながりが、色々な活動の力になっていることも少なくありません。新型コロナが5類に移行し、社会が「アフターコロナ」に舵を切っていく中、改めてこれからのPTA活動を含めた学校のあり方について地域や保護者、学校が知恵を出し合っていくことがこれまで以上に大事になっていくのだと思います。そういう意味ではこの3年間で経験したコロナ禍でのPTA活動は、多くの制限もありましたが、一方ではこれまであたりまえに実施していた活動を見直すひとつのきっかけだったのかもしれない、とも思えます。

終わりになりましたが、地域・保護者・家庭の連携がこれまで以上に大切になっていくことはいうまでもありませんし、コロナ禍で希薄になった人と人のつながりを回復していくことも同様です。ただ少子高齢化が進む現在、地域・保護者や学校のそれぞれにとって過度な負担を強いるような活動については再考する必要がありますし、改めて残すべきものは残し、省けるものは省くなど、できるだけ保護者や学校にも無理がない活動を模索していく必要があると思います。そしてすべての子どもの幸せにつながられるよう、持続可能なPTA活動を構築していけるよう、阿波市PTA連合会としてこれからも活動していきたいと思っております。

今年度メディア等でたくさん取り上げられておりました、子どもの性被害や性虐待について、どのようなサポートがあるのかを考えてみたいと思います、徳島県教育委員会人権教育課・統括指導主事田中貴之先生にお話をお伺いしました。



田中貴之さん

性犯罪・性暴力の当事者にしない 「生命(いのち)の安全教育」について

徳島県教育委員会人権教育課 統括指導主事

田中 貴之 さん

Q1. 子どもを性犯罪・性暴力の当事者にしない「生命(いのち)の安全教育」について教えてください。

A. 性犯罪・性暴力は、被害者の尊厳を著しく踏みにじる行為であり、その心身に長期にわたり重大な影響を及ぼします。令和2年6月に政府で決定された「性犯罪・性暴力対策の強化の方針」、また、令和3年4月施行の「徳島県犯罪被害者等支援条例」を踏まえ、子どもたちが性暴力の加害者、被害者、傍観者にならないよう、すべての学校等において「生命(いのち)の安全教育」を推進することになりました。

Q2. 「生命(いのち)の安全教育」は、現在どのように進んでいますか？また、今後の取組についても教えてください。

A. 徳島県では、令和3年度より「文部科学省指定学校における生命(いのち)の安全教育推進事業」を受け令和3、4年度の2か年にわたり阿南市に委託し、阿南市立大野小学校と阿南市立阿南第二中学校を実践校として研究を進めてきました。実践校では、まず「生命(いのち)の安全教育教材」の指導を通じて生じた課題を踏まえて教材の改善を図り、指導モデルを作成しました。さらに「生命(いのち)の安全教育教材」の充実を図るために、教科及び関連する教育活動等の関連付けを行うなど教科横断的な取組となることが重要であるため、「生命(いのち)の安全教育」の全体計画モデルを作成しました。

徳島県教育委員会と致しましては、指導の充実や事業の理解を深めるために、「生命(いのち)の安全教育推進事業連絡協議会」を開催し、県のホームページにて実践校の指導案や教材を公開するとともに、各研修会での周知を通じて、県内の学校への横展開を図っているところです。

令和5年度は神山町に事業委託し、神山町広野小学校と神山町神領小学校が実践校として研究を進めています。

Q3. 保護者の立場から「生命(いのち)の安全教育」を理解して、サポートできることがあれば教えてください。

A. 生命の尊さを学び、性暴力の根底にある誤った

認識や行動、また、性暴力が及ぼす影響などを正しく理解した上で、生命を大切にする考えや、自分や相手、一人一人を尊重する態度等を就学前教育、小学校、中学校、高校、大学等までの各発達段階に応じて身に付けることを目指すものです。幼いうちから「水着で隠れる部分」は自分だけの大切なところであることや、相手の大切なところを見たり、触ったりしてはいけないこと、嫌な触られ方をした場合の対応等についてお子様と一緒に話し合う機会をもっていただければと思います。

また、学年が上がるにつれて、SNSを通じた被害やデートDV、セクシュアルハラスメント等の性暴力に巻き込まれることも考えられます。日頃から親子で何でも相談し合える関係をつくっていただくとともに「生命(いのち)の安全教育」について御理解、御協力をお願い致します。

【関連サイト】

文部科学省ホームページ

「性犯罪・性暴力対策の強化について」

https://www.mext.go.jp/a_menu/damjo/anzen/index.htm

徳島県教育委員会人権教育課

<https://www.pref.tokushima.lg.jp/ippanokata/kyoiku/gakkokyoiku/7209685/>

～田中統括指導主事からのメッセージ～

児童虐待や子どもの貧困など、現代の子どもたちを取り巻く課題は複雑化・多様化しています。また、昨今のコロナ禍を契機に児童虐待の相談件数や自殺者数の増加など、様々な社会的不安が顕在化するとともに、休校や外出の自粛により子どもたちの生活も大きく変化しました。

このような状況の中、今年度から「生命(いのち)の安全教育」がすべての学校等でスタートし、自分や相手の「心と体」を大切に、互いを尊重し合えるよう授業研究に取り組んでいるところです。御家庭でもぜひ、子どもたちの健やかな成長を願い、自分や周りの人の命と人権を大切にする話し合いの時間をもっていただけると幸いです。

栄えある全国表彰

十一月二十四日（金）東京のホテルニューオータニに於いて日本PTA全国協議会創立七十五周年記念式典（表彰式）が行われました。併せて令和五年度優良PTA文部科学大臣表彰およびPTA活動振興功労者表彰が執り行われました。本県関係の受賞者は次の通りです。心よりお喜び申し上げます。

文部科学大臣表彰

PTA活動振興功労者表彰

県P連副会長 佐藤 央一

（松茂小P）

日本PTA全国協議会

会長表彰・団体

阿南市立阿南第一中学校PTA
美馬市立穴吹中学校PTA

日本PTA全国協議会

会長表彰・個人

県P連前副会長 樺山賢太郎

（瀬戸中P）

県P連副会長 山守ひとみ

（勝浦中P）

県P連前監事 木藤 明宏

（三好中P）

日本PTA全国協議会

会長表彰（特別）

県P連元副会長 廣川 雅英

（江原中P）

「楽しい子育て全国キャンペーン」～家庭で話そう！我が家のルール・家族の絆・命の大切さ～

令和5年度 三行詩コンクール 徳島県優秀作品

中学生の部

「凄いやん！」
母からの一言で
なんでもできる気がする
阿波市立阿波中学校2年 西谷 零

今日の出来事

皆がいつせいに話す夕飯時
阿波市立阿波中学校2年 三浦 亮

ついでにテレビよりおもしろいネタ

阿波市立阿波中学校2年 三浦 亮

いつも母のうしろで

こっそりみまもつてくれる父
阿波市立阿波中学校3年 田中 家継

あまりきづけてないけどありがとう

阿波市立阿波中学校3年 田中 家継

四つの我が家の「合言葉」

おはよう・おやすみ・ごめんなさい
阿波市立阿波中学校3年 山川 璃子

そして何より大事な最後の言葉「いつもありがとう、大好きだよ」

阿波市立阿波中学校3年 山川 璃子

辛い時、苦しい時

どんな時でも支えてくれる
阿波市立阿波中学校3年 吉川 七海

お父さん、お母さんありがとう

阿波市立阿波中学校3年 吉川 七海

ごはんの時

「テレビは見ない、スマホは見ない、顔を見る」
家ぞくの会話がはずむおまじないだよ

三好市立辻小学校3年 高松 大志

私の腕に抱きついて ほっぺたすりすり

「行つてきます」と大きな声
上板町立松島幼稚園 榎本千代乃

充電できたのは あなただけじゃないんだよ

上板町立松島幼稚園 榎本千代乃

他愛もない話

貴重な時間
石井町高原小学校 赤堀 仁美

家族の絆を繋ぐ

石井町高原小学校 赤堀 仁美

母親の体調気づかい

初めての娘が作った晩ごはん
上板町立松島小学校 平野 由紀

忘れられないチャーンハンの味

上板町立松島小学校 平野 由紀

何があってもあなたの味方です。

何があってもあなたを信じてます。
鳴門市鳴門中学校 先田 仁美

何があってもあなたが大好きです。
鳴門市鳴門中学校 先田 仁美

徳島県PTA連合会

小・中学生総合保障制度
自転車総合保障制度

詳しい内容は
パンフレットを
ご覧になるか
取扱代理店に
お問い合わせ
ください

第53回 日本PTA中国ブロック研究大会 広島大会

分科会に参加して

第二分科会 先田 仁美

参加した第二分科会では、「不登校の子どもの気持ちから考える、周囲の大人にできること」というお題で、NPO法人全国不登校新聞社の事務局長である小熊広宣さんの講演を拝聴しました。

現在の最新の不登校の人数は全国で二十四万四千九百四十人で、内訳は小学生八万四千四百九十八人、中学生十六万三千四百四十二人と多数いることにびっくりしました。

不登校には様々な原因があり、子どもたちそれぞれに不登校の理由があります。しかし、不登校の原因がわかったとしてもすぐに学校に行く気持ちにはならず、時間のかかる子どももいます。



不登校の子どもに接する上で大事なことは、子どもの今の気持ちに共感する。親の本音を吐き出す。たまにはガス抜き。同じ経験をした親と話す。そして、家を子どもにとつての安全基地にすること。親は自分の味方であると感じさせる。外で失敗しても戻る場所があるということ。

家庭での対応も大事ですが、学校でも不登校の生徒に対する様々な取組がされており、校内でも安心できる場所づくりに取り組まれているなどの実践発表も拝聴しました。

なかなか不登校の子どもたちの気持ちに寄り添うのも難しい部分ではありますが、一人でも不登校で苦しむ子どもたちが少なくなるようにしっかりと学び、理解していかなければいけないと思います。

第二分科会 蟹江 美子

第二分科会(学校教育)では「すべての子供たちの豊かな学びを実現するために」というテーマで、不登校になつてしまっている子どもたちに、大人である保護者や教員ができることは何かということについて考える機会をいただきました。

①家庭訪問②お手紙③原因探しは不登校の子どもに対して、実際によく行われている対応ですが、実は三大NG対応とのこ

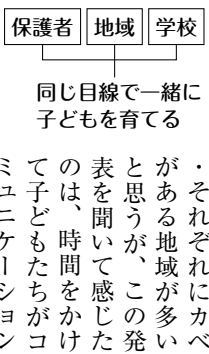


とでした。子どもは「行きたいでも行けない」という気持ちに共感して欲しいと思つているのに、大人は「学校に行きたい」という言葉を捉えて学校に行けるように「何とかしよう、原因を取り除こう」としてしまいがちです。この子どもと大人の認識のズレが、不登校をより深刻なものにしてしまうことがあるそうです。不登校になつていた子どもたちも、その時期を乗り越えて様々な進学・就職・働き方という未来をつかんでいます。不登校で子どもの将来が全て閉ざされるわけではないのです。子どもの今の気持ちを大切に、心の元気がしっかりと溜まるまで寄り添っていくことが大切であると教えていただきました。

第三分科会 藤井 秀美

基調講演「地域とともにある学校・実際に住んでいる地域に当ってはめて考えさせられる事が多かったです。」

PTAは平等の立場であるのが本来の役割ですが、決まった役割から逃げる人、立場を利用して人、そういつた事が日々学校へ通わず保護者に伝わり、PTAの意味が変わつてきているのが現実である。地域の人とのパートナーシップをはかり、やりたいことを伝えたいこと、言いたいことを引き出していく架け橋になつていくようにしたいと思つました。



それぞれにカベがある地域が多いと思うが、この発表を聞いて感じたのは、時間をかけて子どもたちがコミュニケーションを取っていけるよう、たくさんの人との交流をしていくことでカベをなくし、同じ目線で子どもたちを見守り、育てることが出来るのではないかと思います。



第三分科会 辻 孝

一日目は第三分科会「地域連携」に参加。基調講演では、子どもの教育は学校と保護者に加え地域の持つ教育力が重要で、まちに対する住人の想いや人のつながりを基に教育への参加を地域の方々に促すべき、とあった。実践発表・討議では、「地域の中に学校を、学校の中に地域を」「子どもにいつばいの人、大人を浴びさせたい」「子どもにあえて失敗をさせよう」と印象的な発言が多く参考になった。

第三分科会 納田 明豊・広野 真史

地域の人を学校へ参入してもらう必要性和その結果とそれまでのプロセス。

私の地域でもコミュニケーションスクールの推進を強く要望していますが中々うまい事いっていません。

「地域の中に学校を、学校の中に地域を」これの実現のために実現しようとした人達は皆通ってきた道。自分はまだまだ生まれればかり。ヨチヨチ歩きに変わりながら多くの地域の人達と自分達の地域にしか出来ない



いコミュニティースクールを築きたいです。

第四分科会 濱田 恵

「子どものかけがえない命と尊厳を守る」を研究課題とした人権教育の分科会に参加しました。

今、子どもたちの七人に一人は貧困家庭であることや、貧困から生じる虐待のお話などを聞き、改めて虐待が生じる背景の複雑さを知ることができました。また分科会の最後には、子どもへの性虐待や子どもの性被害に関するお話もありました。大人を信じ疑うことのない状況で行われることが多い性被害。特に小さな子どもに対する性被害は子どもに近い人から行われることが多いようで、大人になっても今なお苦しんでいる人はたくさんいるとお聞きしました。「心の殺人」と呼ばれる性虐待はその子の一生を台無しにしてしまいます。

親の育児不安や経済的困窮、人間関係の希薄化など、子ども



たちへの虐待の背景は非常に複雑です。だからといって子どもは絶対に間違っています。子どもたちの命や尊厳を守る取り組みについて、社会全体で考えていかなければならないと強く感じました。

第四分科会 早元 睦晃

育児放棄や児童虐待からスマホ（SNS）依存に至るまでのことについて話を聞きました。親がキャンセル依存などで家庭生活を送らなかつたり虐待を受けたりと、家庭の愛情に恵まれなかつた子どもが将来闇バイトに手を出してしまうことが多いというお話でした。その背景には、孤独になった子どもは周囲へ相談することができず、相談する機関の存在や手段がわからないため、スマホを使って知らない相手とSNSで人との繋がりを探り繋がった人から親切にしてもらった見返りとして、無理な相談を持ちかけられて、断



ることができずオレオレ詐欺や特殊犯罪などをするようになるようです。

このように子どもを孤独にさせないために、家庭でのコミュニケーションはもちろんですが、近所に住んでいる周囲の大人もあいさつや声掛けをすることで子どもたちは見守られているという安心感や自己肯定感をもつことができるようになることのできた。

親の愛情や近所にいる大人の存在は子どもにとっては計り知れないことだと改めて学ぶ機会となりました。

第四分科会 田淵 郁康

私は第四分科会人権教育に参加させて頂きました。研究課題は、「子供のかけがえない命と尊厳を守る」幸せに育つ子供の未来のために」をテーマの講演を拝聴し、子ども達の人権を守るためには、子ども達だけでなく保護者も含めた方を、地域コミュニティの力も借りながら、地域社会全体での支援協力が必須だと改めて思いました。

しかし、近年では核家族化が進み、またコロナ禍で地域コミュニティが希薄になっているので、地域コミュニティの活性化をすれば全体として良くなるのかなと思いました。

また性被害等に関する問題について、パネリストの方々との討論を拝聴して、被害者が加害者との関係性で問題が浮上してこない事が多数あると言う現状



を知り、この問題はかなり闇が深く解決が困難な事なんだと考へさせられました。

第五分科会 阿部 美紀

PTA活動を皆さんに知ってもらう最大のツール、広報。広報からPTA活動の魅力を感じてもらっているでしょうか。今回、私の参加した分科会では、「PTAの活性化を図る効果的な広報活動の在り方、思いや考えを伝えるための方法」について、道佛一郎さんから講演をいただきました。

PTA広報は、PTA組織を会員に正しく認識してもらい、信頼関係を構築し、多くの会員の考えや社会の動きなどを正しく受け止め発信する双方向コミュニケーションの役割を担っています。効率的に思いや考え方が伝えられ、活動を記録して残しておくことができます。

たとえば、実績の報告や活動内容の紹介をすることでPTA活動の理解を深めてもらい、今後のPTA活動について周知し、



積極的な参加を募ります。組織を活性化させるためには、広報活動への取り組みは大切です。一度では伝わらないなら二度、三度と告知し参加者を募る。言葉を選び受け手の立場に立って考え整理する。この手順が不可欠です。

子どもたちのために楽しくPTA活動に参加させてもらえることが、広報を読んでくださる方にわかりやすく伝える手段が広報。広報を読んでPTA活動に賛同・参加が増えることが効果的な広報活動ではないのかと思います。

全体会に参加して

濱田 恵

心のトリセツと題した黒川伊保子氏による全体会記念講演では、自らを変えていこうとする意欲を脳科学から迫っていくお話でした。

脳の仕組みを理解することで自分をコントロールする。脳をしつかり癖づける。このように文章にすると堅苦しい気もしますが、子育てや家族という仕組みの中で、自然と身に付けている部分もあるように感じました。私ごとでも印象に残っているお話は、縄跳びを出来ない子はいない。やり方があっていないだけ。何回教えても出来ないと思っ

たら、教える側が変わればすぐできる。人間の体の動かし方は、脳の仕組みからすると四つしかない。四人が教えればそのうちの誰か一人の教え方がその子にマッチし、必ず跳べるようになる。だから、跳べない子を追い詰め、いつまでもやらせるのではなく教える側が変われば



いいのです。と言うお話です。なんだ、そういうことかと思議と納得。徳島へ戻り、早速娘たちに縄跳びをやらうと言ってみましたが、すっかり大きくなった娘たちはチラッと私を見ただけでした。それでも声を荒げてはいけません。自分をコントロールする脳科学の話聞いてきた私です。縄跳びに関する話は、まだ小さな子どもさんがいらっしやのご家庭でぜひチャレンジしていただけたらと思います。

辻 孝

二日目の全体会は、参加者の数や会場のスケールに圧倒、子どもたちのパフォーマンスも素晴らしく、記念講演も、AI開発者で脳を装置として考える黒川伊保子氏の「対話の奥義」は興味深いものだった。いきなり「ダメ」と言わず、「いいねえ」と言えるよう努めたい。今大会で得た知識や登壇された方々の熱意を浴びて、保護者として地域の人間として、子どもたちのための教育のために今後も学校と協働していきたいと思った。

先田 仁美

昨年の山形大会に引き続き、今年は広島大会ということで徳島県から十一名が参加していました。二日目全体会として、まず広島ジュニアマリンバアンサンブルの子どもさんによるマリンバや太鼓などの演奏を拝聴しました。皆さん、この日のためにいっぱい練習してきたのがわか



るパフォーマンスで会場は大いに盛り上がり、感動をたくさんもらえた演奏でした。

記念講演として、人工知能研究者である黒川伊保子さんの講演。今までしてこられた脳の研究のお話をユーモアたっぷりのお話し調でたくさんお話しくださいました。

特に印象に残ったのは、指先タイプは手首でバランスをとる。手のひらタイプはひじでバランスをとる。これは、ベットのボトルのキャップを開ける際に指先で開けるのか、手のひらで開けるのかというところで、私は指先タイプなので確かに何でも手首でバランスをとつてるなど実感。テニスをしている息子も私と同じで指先タイプ。そのせいなのか手首でラケットを操っているところもあり、本当だなと実感しました。普段のなにげない生活の中でもほとんどのことが脳に直結していること知り、すごく興味深かったです。

広島大会開催にあたり、長年に渡り準備を進めてこられた広島県PTA連合会の皆さんに感謝し、また今年も貴重な学びを得たことを嬉しく思います。来年は、川崎大会です。多くのご参加をお待ちしております。

蟹江 美子

記念講演をされた黒川伊保子さんは、人工知能の研究から脳科学の研究に手を広げられており、脳を装置として捉える考え方はプログラミング的であると感じました。指先タイプ・手のひらタイプといったわかりやすい表現で脳のタイプによる特徴を説明してくださり、子育てだけでなく普段の人間関係やスキルアップにも参考になるお話を聞くことができました。

オープニングアトラクションの広島ジュニアマリンバアンサンブルさんの生き生きとした演奏から元気を、全国から集まった各PTA関係者の皆さんから熱意を受け取ることができた研究大会でした。PTA活動の在り方、役割について様々な意見がありますが、子どもたちに寄り添い共に成長していけるようなPTA活動を続けていきたいと思えました。

藤井 秀美

心のトリセツ監督が怒ってはいけない大会。結果や責任で追いつめることは脳にとって良くない。発想力や対話力、戦略力の回路を阻害する。今も昔も、子どもの習い事の

スポーツはまさに今回の話の中に「あるある」と思えることが多くありました。勝ち負けで上に立つ大人が、毎日コツコツ努力している子どもを褒めるよりも先にミスをした場面やなぜ勝てなかったのかと話す場面に立ちあうことがあるが、メンタル面でも子どもを傷つけていると思う。まずは、褒めてあげて緊張を解きほぐすことが大事である。指導者であっても同じ目線で考え、対話することが大事だと思いました。

いきなり「ダメ」で、自己肯定感を下げってしまうのは日本人の特徴である。学校でも働いていても、そうだよなと思えてしまっているのは残念です。ポジティブに考えられるようにコツコツと「継続は力なり」で子育て、親育てをしていきたいです。

納田 明豊・広野 真史

結果や責任で追いつめること「余計なことを考えず、がむしゃらに突き進む脳神経回路」を活性化する。

一方で「発想力、対話や長期の戦略力」の回路を阻害する。これは、私が今一番想っている事で何とかしないといけないと思ふ。タイムリーな内容だったので、改めて考え方も新時代を迎えないといけないと強く想いました。気付いた大人が全力でこの考えをそれぞれのコミュニティーで広げないといけない、子どもたちの為に。



早元 睦晃

脳科学、人とのコミュニケーションについて学びました。自らの子育てからの実体験と科学を取り入れた根拠、会話のプロもあって、すごく分かりやすい説明で最後まで楽しく聞くことができました。

印象に残った内容では、対話術について、人の話には共感し、自分の話は結論から話す。否定が必要な場面では初めから否定はせず、肯定や同意をしてから話すという事です。自分と重ねると、子どもたちには否定してしまふことが多い部分も多い内容でした。また失敗することにより、脳のセンスが磨かれ会話のセンスも向上することです。話すことが苦手な自分にとっては、前向きになるお話でした。人間自身できることから取り入れていければと思います。



田淵 郁康

まず始めに歓迎アトラクションとして、広島ジュニアマリオンバンドによる演奏会で、とても楽しく子供たちの一生懸命な姿に感動しました。

そして、大会記念講演では、心のトリセツ「逃げ癖」を「意欲」に変える脳科学のテーマで、黒川伊保子氏による講演も非常に分かりやすく、脳科学による観点からの行動や言動の違いなどについて、これからの急激な変化が予想される今後の社会を乗り切るためには、保護者も子供たちも新たな学びが必要という事を学びました。

この経験を活かし、保護者・先生・地域の皆様方のご協力を得て、これからのPTA活動が益々充実したものになり、子ども達が元気にすくすく育ってくださるように頑張っていきたいと思います。

国内研修事業

学びあり笑いあいの五日間

小松島南中学校



住友 琴音
私は、今回の国内研修でたくさんの学びと友情を得ることができました。



一つ目は、四日目の国際交流プログラムです。この交流では、坂田さんと望月さんのお話を聞きました。坂田さんは、沖繩の人々のためにたくさん行動をされていました。私は、何か行動しようと思っても、始められなかったり、続かなかつたりし

ます。私の今までの行動は、動機が薄いのだらうなと思いました。

これからは、しっかり動機を考えてから、行動しようと思いた。また、坂田さんのお話の最後に、どのような世界



を作っていくかということ聞かれました。私は、人々が楽しい気持ちになれるような世界を作っていきたいです。

二つ目は、三日目の海洋研修とエイサー体験です。海洋研修では、一緒に行動したメンバーと協力しながらカヌーを動かしました。楽しんで研修を終えることができたのではないかと思います。

エイサー体験では、後半の発表に向けて、班のメンバーと一生懸命練習をしました。わからないところを南風原高校の方が丁寧に教えてくださり、本番では最高のパフォーマンスができました。優勝はできませんでしたが、メンバーとの絆を深めることができました。

私の十四年間の人生の中で、最も充実した五日間でした。

編集後記

コロナ禍をへて、今年度はさまざまな活動が従来に近い形で開催されました。活動の中でたくさんの学びを、この広報紙でお伝えできましたことを嬉しく思います。

広報紙作成にあたり、ご協力ご支援頂いた皆様に心より感謝申し上げます。

広報委員一同